

白井聡子<sup>a</sup>、長野泰彦<sup>b</sup><sup>a</sup> 日本学術振興会／筑波大学、<sup>b</sup> 国立民族学博物館

## 1. 本発表の内容と目的

本発表ではダパ語（メト方言、白井の調査による）とギャロン語（ボラ方言、長野の調査による）における方向接辞の形態法および機能を対照する<sup>1</sup>。ダパ語は方向接辞の機能面で、ギャロン語は形態面で、タングート＝チャン語支の中でも顕著な特徴を持っている。対照的記述から両者の特徴を明らかにすると共に、方向接辞の対照研究に向けた分析基準を提案する。

## 2. 形態

## 2.1 方向接辞の種類と形式

表1 ダパ語とギャロン語の方向接辞

| 方向          | ギャロン語     |      |        | ダパ語         |      |
|-------------|-----------|------|--------|-------------|------|
|             | 基本形       | [間接] | [非過去]  | 基本形         | [禁止] |
| 上 (UPW)     | to-       | ta-  | (to-)  | ʌ-          |      |
| 下 (DWN)     | no-       | na-  | na-    | a-          | na-  |
| 山の方へ (MTNW) | ro-       | ra-  | (ro-)  |             |      |
| 川の方へ (RIVW) | ri-       |      | re-    |             |      |
| 上流 (URIV)   | ko-       | ka-  | ku~kə- | kʌ- (内 INW) | ka-  |
| 下流 (DRIV)   | nə-       |      | di~nə- | ŋʌ- (外 OUT) | ŋa-  |
| 一般的移動 (NTL) | yi- (ya-) |      | yi-    | tʌ-         |      |

ダパ語の方向接辞は5種類で、同語支の中では一般的な数である。そのうち、a-/na- ‘DWN’ 以外の4つの方向接辞は、母音が直後の動詞語幹に応じて i, o に交代する: ki-ttsil (INW-食べる)、ko-hcol (INW-結ぶ)。一方、ギャロン語は7種類の方向接辞を持つ。長野の1980年代の調査（チョクツェー方言）では、これに加えて上座 (ku-)・下座 (ni-)・行って戻る動き (ne-) の区別があり、かつ、下と下流が同形 (no-) で、合計9種類の方向接辞があった (Nagano 1984: 28-30)。これはチベット＝ビルマ語派において突出して多い<sup>2</sup>。また、現在のギャロン語では、直接認識／間接認識の区別、および、非過去の文（一般的に方向接辞不要）で特別に用いられる場合の形式が発達してきている<sup>3</sup>。

なお、両言語とも格助詞を持つが、ダパ語には起点を表す助詞がない (白井 2010: 293-294, 304-305)。いずれの言語においても、地点間の移動に方向接辞が用いられることで、移動の方向が明示されるという現象が見られる。

## 2.2 方向接辞の位置

ここでは、方向接辞の形態法について、付加される位置の問題を中心に検討する。明瞭化のため、例文中では、方向接辞を太字で示す。また、方向接辞が付加されない文の語釈の後に【Dなし】と表記する。

<sup>1</sup> 長野が1980年代に調査したチョクツェー方言についても一部言及する。両方言は地理的に近接していて相互理解可能。差異はおおむね世代差と考えられる。

<sup>2</sup> ただし、この区別の多さは、祖語の特徴を反映しているのではなく、後代の innovation である可能性が高い。ラワン語など別語支の言語の方向接辞と比較しても、これほど多くの方向を区別する接辞体系がチベット＝ビルマ祖語にあったとは考えがたい。

<sup>3</sup> さらに、方向接辞と同形式ないし類似形式の動詞語幹があるが、これらは方向接辞に動詞不定形の接頭辞 ka- を付けて動詞化することによって形成されたものと考えられる。

ダパ語の動詞には、2つの接頭辞（方向と否定）が同時に付加されうる。方向接辞の位置は、常に、左端である:(1)-(3)。助動詞文においては、助動詞が動詞に後続する。方向接辞以外の動詞接辞は助動詞に付加されるが、方向接辞は動詞語幹の左側に付加される:(3)。

(1) ダパ語：陳述

- a. ndofdi=antehi3      ŋΛ-mə-heΛ-a1.  
かまど灰=しか      OUT-NEG-残る-B.PFV  
「(何もかも失われて、) かまどの灰しか残らなかった」
- b. zei3    tΛ-mə-khe-a1      rε3.  
妻      NTL-NEG-与える-B.PFV    NFC  
「(約束していたのに、) 娘を嫁に (Lit. 妻を) やらなかった」

(2) ダパ語：命令

- a. ko-ttsu2.      b. ka-ttsu2.  
INW-eat.IMP      INW.PROH-eat.IMP  
「食べる」      「食べるな」

(3) ダパ語：助動詞

- nda1      mahtsa3    khonkhei3    zi3      tciteil      a-tε3      mə-n-a2.  
以前      全く      こんな      雪      大きい      DWN-降る    NEG-EXP-B.PFV  
「今まで、こんな大雪は降ったことがない」

ギャロン語の動詞接頭辞には、5つのスロット（左から順に、P1～P5）がある。

方向接辞は、(i) P2 に置かれると方向と共に過去を表す:(4a, b)。P1 の位置には否定や疑問の接頭辞が付加されうる。(ii) ゼロだと非過去を表すが:(5a)、非過去の文でも方向を（動詞の種類や副詞で表せるにもかかわらず）特に接辞で示そうとする場合は、P2 の位置に現れうる:(5b)。(iii) 命令文においては、P1 の位置に義務的に現れる:(6a, b)。P2 の位置には進行相の接頭辞が付加されうる。(iv) 助動詞文においては、動詞不定形が用いられるため、そこに方向接辞は付加されない:(7a, b)。ただし、助動詞には方向接辞を取り得るものがある:(7b)。

(4) ギャロン語：過去

- a. wu-toñ      mə-nə-(tə-)ši-w?  
3SG.GEN-意味      Q-PST.DRIV-(2-)知る-2SG>3  
「その意味が分かりましたか？」
- b. wujo    kuru?      zinkey{zinkam-y}    jikthal {ja-yi-kə-thal}-tə      thakčhot    nə-ño.  
3SG    チベット    地域-LOC      NEG-PST.NTL-3SG-行く-DEF    確か      EVI-LKV  
「彼がチベットに行かなかったことは確かだ」

(5) ギャロン語：非過去

- a. ña      din {Ø-dit-ñ}.  
1SG      Ø-与える-1SG      【Dなし】  
「私は与える」
- b. təmu    mə-nə-rtsi      no-ño-y,      ña    ka-čhe    ñ-əsem      ma-na-we.  
天気    COND-EVI-良い    EVI-LKV-LOC    1SG    INF-行く    1SG:GEN-気持    NEG-DWN-来る  
「天気が良くても、私は行く気が起きません」

(6) ギャロン語：命令

- a. štə      w-əsmān      təji      w-əngu-y      tosəcolow {tə-sə-colo-w} .  
これ    3SG:GEN-薬    水    3SG:GEN-中 LOC    IMP.UPW-CAUS-混ざる-2SG  
「この薬を水に混ぜよ」

b. štə w-əsman təji w-əngu-y tokscolow {to-kə-sə-colo-w} .  
 これ 3SG:GEN-薬 水 3SG:GEN-中 LOC IMP.UPW-PROG-CAUS-混ぜる-2SG  
 「この薬を水に混ぜている」

(7) ギャロン語：助動詞文

a. ŋa jɪŋjak ka-pa čha-ŋ.  
 1SG 泳ぎ INF-する できる-1SG 【D なし】  
 「私は泳げる」

b. nəjo čamdo-y ka-che mə-no-ndo-s.  
 2SG チャムド-LOC INF-行く Q-PST.DWN-ある-PFV  
 「チャムドへ行ったことがありますか?」

以上の対比から、ギャロン語においては固有の動詞接辞体系の中に方向接辞が組み込まれているのに対し、ダバ語においては方向接辞が独特の振る舞いを示すことが分かる。つまり、ギャロン語においては、後述のように方向接辞が文法化して機能拡張を遂げると共に、それぞれの機能に応じた接辞スロットに組み込まれていったと考えられる。一方、ダバ語においては、方向接辞が「動詞語幹前の左端」以外の位置に現れることがなく、ここが方向接辞独自の位置であると考えられる。

## 2.2 方向接辞の機能の拡張／変化

方向接辞本来の機能は、移動の方向を表示することであると考えられるが、ダバ語、ギャロン語のいずれにおいてもそれ以外の機能への拡張が見られる。機能拡張には、大きく分けて、2つの方向がある。

(i) 個別の接辞の意味拡張：例えば、「下流へ」>「外へ」>「劇的に」（ダバ語）、「山の方へ」>「前へ」、「上へ」>「完遂する」（ギャロン語）など。

(ii) 方向接辞全体がテンス・アスペクト・ムードの標識として機能する<sup>4</sup>。

ここでは、(ii) について対照と分析を行う。

両言語とも、(ii-a) 完了<sup>5</sup>および命令の述部において、方向接辞が義務的に現れる、(ii-b) 形容詞語幹に方向接辞が付加されると、状態変化を表す、といった特徴を共通して持つ。また、いずれの言語においても、多くの場合、方向接辞とそれが結びつく動詞の意味には直接的な論理性がない。

ギャロン語では、本来「下流へ」を意味する方向接辞 nə- が、一般的に過去を示す接辞として機能する<sup>6</sup>: (4a), (8)。また、nə- 以外の接辞が中立的に用いられる動詞もある。例えば、pšit 「唾を吐く」には no- 「下へ」が中立的: (9)。なお、(10) のように to- 「上へ」を用いることも可能で、これは、傲慢なことをして自業自得の結果を招いたことを含意する表現になる。(11) は状態変化の例。

(8) ギャロン語 nəjo tərjap nətsarn {nə-tə-sar-n} mə-ŋos?  
 2SG 妻 DRIV-2-引く-2SG Q-LKV  
 「あなたはお嫁さんをもらったのですか」

(9) ギャロン語 ŋa mišthit nopšin {no-pšit-ŋ}.  
 1SG 唾 DWN-唾を吐く-1SG  
 「私は唾を吐いた」

<sup>4</sup> このように方向接辞が全体として他の文法機能を担うようになる現象としては、チベット＝ビルマ語派以外の言語においても、適用態や他動詞化の標識になる例があることが、『言語学大事典』「方向表現」の項（亀井ほか編 1996: 1298-1302）に紹介されている。

<sup>5</sup> ギャロン語の方向接辞の機能は、文の述部における振る舞いを見る限りでは過去時制を表すのが第一義であると考えられるが、本来的には完了である。次の例では、非過去の文に方向接辞 no- が現れる。方向接辞の付加された動詞（本来、完了相）が反復されることで習慣相を表している: wujo (3SG) no-we (DWN-come.NPST) no-we (DWN-come.NPST) nə-ŋos (EVI-LKV) . 「彼はしょっちゅう来るのです」

<sup>6</sup> これと並行的な現象がある。kə- は1・2人称 PROG マークだが、現在時制の文において方向を特に表示する必要がある場合の「上流へ」を意味する方向接辞でもある。

(10) ギャロン語 *ña mišthit topšin {to-pšit-ñ}*.  
 1SG 唾 UPW-唾を吐く-1SG  
 「私は天に向かって (Lit. 上へ) 唾を吐いた」

(11) ギャロン語 *ñiyōne to-kte*.  
 3SG.HON UPW-大きい  
 「あの方は大きくなりました」

一方、ダパ語では、いずれかの方向接辞が一般的な完了の標識として用いられることはない。移動を伴わない動詞の場合、動詞ごとに結びつく接辞がほぼ決まっている。(14) は状態変化の例。

(12) ダパ語 *lemε3 ko-fido1 hce-a3*.  
 僧 INW-待つ PST-B.PFV  
 「お坊さんは、(犯人が現れるのを) 待った」

(13) ダパ語 *me3 ta-εΛ=nda1 a-hso-a3*.  
 母 NTL-死ぬ=前 DWN-命令する-B.PFV  
 「母親は、死ぬ前に (子供たちに) 命じた」

(14) ダパ語 *ŋoro1 Λ-tei-a1*.  
 3SG UPW-大きい-B.PFV  
 「彼は大きくなった」

非過去の文においては、両言語でかなり振る舞いが異なる。

ギャロン語で非過去の文に方向接辞が現れることはまれである。その背景には、P2 接辞がゼロであることが非過去を表すことや、非過去の文で動作の方向を示したい場合はそれぞれの方向に対応した副詞を用いることが可能だということがある。(5b) や (12) はあえて方向接辞を用いている例と言える。

(12) ギャロン語 *šimomo yižo santsam mə-ku-ta-y, makmə kupjaj {kə-wu-pja-y}*.  
 今 1PL 国境 COND-URIV-行く-PL 兵士 URIV-3>1-捕まえる-1PL  
 「もし今国境に行ったら、兵士が我々を逮捕するでしょう」

ダパ語においては、非過去の述部の動詞にもしばしば方向接辞が付加される。付加される環境は、ある程度随意的な側面もあるものの、アスペクトと相関する傾向があり、以下のように分析できる (Shirai forthcoming)。限界性のある (+telic) 述部の場合、未来および蓋然性を表す文では方向接辞が付加される強い傾向がある:(12),(13)。限界性のある (+telic) 文でも、進行相であれば、方向接辞は付加されない傾向が強い:(14)。限界性のない (-telic) 述部を持つ非過去の文では方向接辞の付加は任意で、付加されない傾向が見られる:(15),(16)。

(12) ダパ語 *ŋoro1 (rosa3) kjemΛ1 Λ-ccil t-ε3*.  
 3SG (すぐ) 服=ACC UP-着る IPFV-B.IPFV  
 「彼は (すぐに) 服を着るだろう」 (\*「彼は服を着つつある」)

(13) ダパ語 *ko-htu1 ndu3*  
 INW-感染する ITR  
 「感染してしまうだろう/感染しやすい」

(14) ダパ語 *paŋjΛ3 teuu2 tondol t[he=t-ε3*.  
 子供 今 コップ 壊す=IPFV-B.PFV 【Dなし】  
 「子供が、今、(いくつもの) コップを割っている」 (\*「子供がコップを割るだろう」)

- (15) ダバ語    somuŋj3    ŋa=rɔ3    pɔhŋɔ3    hɛgɛhɛ=wu3    ji=t-ɛ3.  
 明日        1SG=GEN    子供        先生=ACC    手伝う=IPFV-B.PFV    【Dなし】  
 「明日、私の子供は、先生を手伝う（ことになっている）」
- (16) ダバ語    ŋa=rɔ1    zɔntɛhi3    aɔwɔ3    lei3    mɛ=ndu2.  
 1SG=GEN 娘                    ときどき    包子        作る=ITR                    【Dなし】  
 「私の娘はときどき包子を作る」

以上のことを踏まえて、再度、ギャロン語で非過去文に方向接辞が現れる限られた例を見ると、いずれも、[+telic]、非進行相であると言える。ダバ語において広く見られる現象が、ギャロン語では限定的に現れていると分析できる。

### 3. 文法化の段階

方向接辞は、形態および機能の両側面において、どのような変遷をたどっているのだろうか。前節での観察を踏まえて分析を試みたい。

#### 3.1 接辞順と文法化

方向接辞の起源としては、場所名詞や動詞からの文法化が考えられる<sup>7</sup>。たとえば、ダバ語の方向接辞 *ka-* ‘INW’ は、場所名詞 *khɔpi1* 「内側」の語幹 *khɔ-* と同源である。また、Nagano (1984: 157-167) は、ギャロン語の方向接辞の起源が祖語の動詞語根である可能性を指摘している。しかし、ここでは一つの起源を検討することはしない。

2.1 で見た両言語の対照から明らかになったのは、接辞としての位置づけの違いである。ダバ語において常に動詞の左端に付加されるという事実は、文法化などによって発達した一連の方向接辞が、その原始的な位置にとどまっている可能性を示唆している。例えば、ダバ語の語順において、場所名詞は移動動詞の直前に現れるのが自然である:(17)。また、移動の目的を表す動詞が移動動詞の直前に現れうる:(18)。場所名詞ないし動詞から文法化した要素が、動詞の左に現れるのは、このような語順に対応している可能性がある。

- (17) ダバ語    no1        nopi3        na-ju2.  
 2SG        外側        DWN.PROH-行く／来る.IMP  
 「外に行くな」
- (18) ダバ語    ŋa1        tɔ3        le1        a-ji3                    wu2.  
 1SG        水        汲む        DWN-行く／来る    PFT  
 「わたしは（すでに）水を汲みに行った」

一方、ギャロン語では、ムードの接辞は最も外側に、テンス・アスペクトの接辞はその内側に、という、接辞の階層の中に、方向接辞が組み込まれる。このことから、形態面での文法化（接辞化）がより進んでいると考えられる。

チベット＝ビルマ語派における接辞順の歴史的研究は進んでいない。しかし、方向接辞 (D) とムードの接辞 (M) の位置関係について、D がより動詞語幹に近い（例えば、ギャロン語のように M-D-(x<sup>n</sup>-)V となる）か、より動詞語幹から遠い（ダバ語のように D-M-V となる）かという違いは、方向接辞の文法化段階をはかる、形態面の尺度の一つとなる可能性がある。

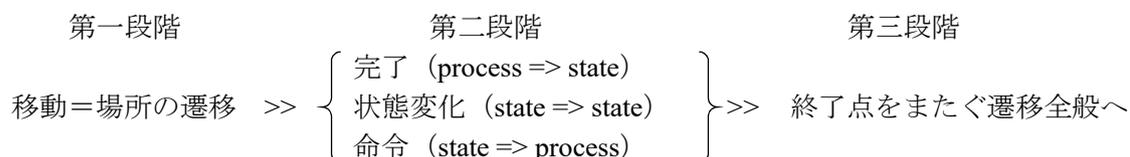
#### 3.2 機能と文法化

文法化のもう一つの側面は、本来の意味の希薄化に伴う機能の一般化である。2.2 節では、両言語にお

<sup>7</sup> チベット＝ビルマ祖語の方向接辞の体系は未詳である。西田 (1989: 806-807) は、祖語にも数種類の方向接頭辞があったとする。

いて、方向接辞が、方向だけでなく、完了・状態変化・命令をも表示することを見てきた。方向接辞の機能の発展に関する西田 (1989: 807) の分類では、状態変化や命令が考慮されていないほか、ダパ語のタイプは、I (過去・非過去の双方) , II (過去時のみ) のいずれにも当てはまらない。

Shirai (forthcoming) では、ダパ語の現象について、遷移 (transition) ないし 境界越え (crossing boundaries) (Tatevsov 2002: 330-332; Desclés and Guentchéva 2012: 127) という概念で一貫した説明ができる可能性を示唆した。ここで、ギャロン語の言語事実を勘案すると、以下のような機能拡張の段階があることが仮定できる。



第二段階と第三段階の順序は、議論の余地がある。ここでは、仮に、第二段階で方向接辞の機能から「場所」という限定が希薄化し、一部のアスペクト・ムードの遷移への拡張が起き、その後、終了点をまたぐ遷移全般を表示する機能へと広がるという仮説を採った<sup>8</sup>。別語支のライ語などで、一部の方向接辞が一部のテンス・アスペクトの標識に配分されるという現象が見られることから (Peterson 2003: 414-415, Kavitskaya 1997: 176-178)、方向接辞からアスペクト等への機能拡張が一部分にとどまるのがより古いタイプで、次第に拡張したというこの仮説には、一定の妥当性がある。順序の妥当性や、第二段階の細分化などの問題については、今後、他の言語との対照を進めることで明らかになる可能性がある。

【略号】 1 - first person; 2 - second person; 3 - third person; > - action going from left to right; ACC - accusative; B - Pattern B (non-egophoric); CAUS - causative; COND - conditional; D - directional prefix; DEF - definite; DRIV - downriverward D; DWN - downward D; EVI - evidential; EXP - experiential; GEN - genitive; HON - honorific; INF - infinitive; IMP - imperative; INW - inward D; IPFV - imperfective; ITR - iterative; LKV - linking verb; LOC - locative; MTNW - mountainward D; NEG - negative; NFC - neutral factual; NTL - neutral D; OUT - outward D; P - prefix; PFT - perfect; PFV - perfective; PL - plural; PROG - progressive; PROH - prohibitive; PST - past; RIVW - riverward D; SG - singular; Q - question; UPW - upward D; URIV - upriverward D;

【参考文献】

- Kamei, Takashi, Rokuro Kono, and Eiichi Chino (eds.) [亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編)] (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』東京：三省堂。
- Kavitskaya, Darya (1997) Tense and aspect in Lai Chin. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 20.2: 173-213.
- Nagano, Yasuhiko (1984) *A historical study of the rGyarong verb system*. Tokyo: Seishido.
- Nagano, Yasuhiko [長野泰彦] (2001) 「嘉戎語の基本構造」『国立民族学博物館研究報告』26.1: 131-164.
- Nishida, Tatsuo [西田龍雄] (1989) 「チベット・ビルマ語派」亀井孝他 (編) 『言語学大辞典 第2巻 世界言語編 (中)』, 791-822. 東京：三省堂。
- Peterson, David A. (2003) Hakha Lai. In Thurgood and LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*, 409-426. London/New York: Routledge.
- Shirai, Satoko [白井聡子] (2010) 「ダパ語の「格」を表す形式」澤田英夫 (編) 『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1 : 格とその周辺』府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- Shirai, Satoko (forthcoming) An analysis of the aspect-marking function of directional prefixes in nDrapa.

本発表は科研費 (課題番号 16H03414, 17J40087) の研究成果の一部である。

<sup>8</sup> この仮説上の第三段階は、西田 (1989: 807) の類型 II よりも文法化が進んだ段階であり、ギャロン語や西夏語は第二段階にあり、ダパ語は第三段階へ進みつつあると考えられる。一方、仮に、第二段階と第三段階の順序を逆と考えるなら、まず、遷移全般への拡張が起き、その後、完了・状態変化・命令へと、再度の機能限定が起きたと仮定することになる。